

都市の犯罪及び非行現象の地域的考察 弘前市の場合

中 村 母美江

I はじめに

最近の青少年の不良化、犯罪は年ごとに増加の一途をたどっており、これが大きな社会問題となつて久しいが、その対策が当面の問題となっている。そこで筆者は、犯罪少年（14才以上20才未満の少年で刑法に違反する行為をした少年）、不良行為少年（飲酒、喫煙、家出、怠学等、少年の行為として好ましくないいわゆる不良行為のあった少年）の発生地居住地などの地域性を見て、その現状と性格を解明していきたいと思う。

II 資料とその方法

「不良行為少年発見票」「犯罪統計票・被疑者原票綴り」から昭和36年、昭和40年のそれぞれの市街地における犯罪少年の分布図（犯罪発生地と居住地）36、40年それぞれの不良行為少年分布図を描き、次に100mのメッシュをかけ、密度分布図を作成し、36年から40年への変化と地域性を見て、さらにこれらの性格解明のために、40年度の所得（町内別で10軒に1軒を抽出しその平均値）、旅館・飲食・接客業のそれぞれ分布図、密度分布図を描き重ね合せて、その関係を見た。又、不良行為少年の高い所は人口密度、住宅状況（住居の種類数）、職業構成から吟味して見た。

III 不良行為少年の場合

1. 36年から40年への変化

不良行為少年は36年842件であったのが40年では1568件となり約2倍に増加し、女子では36年、65件が40年になると224件で3.5倍となっており、男子と女子の比率が6.1となっている。

(1) 年令の変化

16才未満の少年が下降し、16才以上が上昇しつつある。そのうちでも特に14才未満の少年が36年では、全体の11.7%であったのが昭和40年では4.1%へ減少と、16才が36年は全体の19.0%であったのが40年では22.9%へと増加が見られる。女子の場合、15、16、17才の年令者の増加が多い。36、40を通じて、17才の年令者がいずれも高い割合で不良行為少年が多く表われている。

(2) 職業の変化

36年916件を100%とし、40年1604件を100%として、縦軸に割合、横軸に絶対数を表わし、36年を黒点、40年を赤点で示し座標を作った。これを見ると、絶対数、

相対数において高校生、無職者が伸びているが、反面小学生、農業従事者が減少している。高校生が増加している事は、年令16才の上昇と17才の高率という状況と一致する。又農業従事者の減少は、わが国全般的傾向で農業人口の減少により農業従事者による不良行為少年も減少している。中学生は数量面において36・40年ともに331件、335件で変化しないが、割合において36.6%から20%へと下ってきている。

2 36・40年との地域別状況

ここでは行政区分による市街地区と周辺地区(12地区、12町、その他県内)との関係を見ていく。市街地区と周辺地区とは36・40年ともその比率は、2:3である。

(1) 地域別の変化

36・40年の不良行為少年の件数を100%として各地区の伸びぐあいを見たのが図3である。36・40年とも市街地区が断然トップであり、項目「不明」は40年において36年より、はるかに変遷を示すのは、少年自身が住所を言わず、学校名で返答しているのを「不明」に入れたが、この半分は学校名返答者である。

36年と40年との増減を比較すると、40年に入って増加しているのは、清水地区、岩木町があり、反対に減少している地区は、堀越・和徳地区、藤崎町がある。前者は、近年の住宅や学校の設立、土地開発などの増加に伴い、バスの増発が起った地区であり、後者は国道七号線沿いで昔から交通の便が良く市街地区との交流が多い地区である。この不良行為少年は弘前市の東部から西部へと伸びる傾向を示している。

(2) 地域別の職業

各地区総合計を100%として職業別割合を見ると有職者の中に農業従事者を含んでいるのが普通であるが、ここでは農業地帯であるため農業従事者を別の項目とした。

36年から40年へかけて各地区とも、例外なく農業従事者は減少している。さらに詳しく見ると、市街地区では他の周辺地区よりぐんと少なく3%から2%へと減っている。一般に大都市においては、有職少年が最も多く、他の中小都市では中学生が多いと言われているが、40年弘前市全体に就いて見るとそれが認められる。しかし市街地区の場合、中学生、高校生の占める割合と有職者、無職者の割合を比較すると、36年では中学生が多かったのが、40年になると有職者、無職者が増加してきている事は、大都市ほどではないが、農村から都市へ人口が大きく流れていることから考えられる。

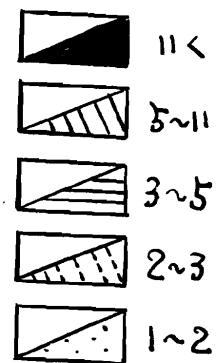
3. 市街地区

A:市街地を詳しく調べ、どのような地域に不良行為少年の分布が多く、又どんな環境にあるかを見ていくため、市街地全体をドットマップ・密度分布図から見ていく。

(1) 36年不良行為少年居住地の分布

図1

昭和36年度
不良行為少年の密度分布図



0 100 1000m

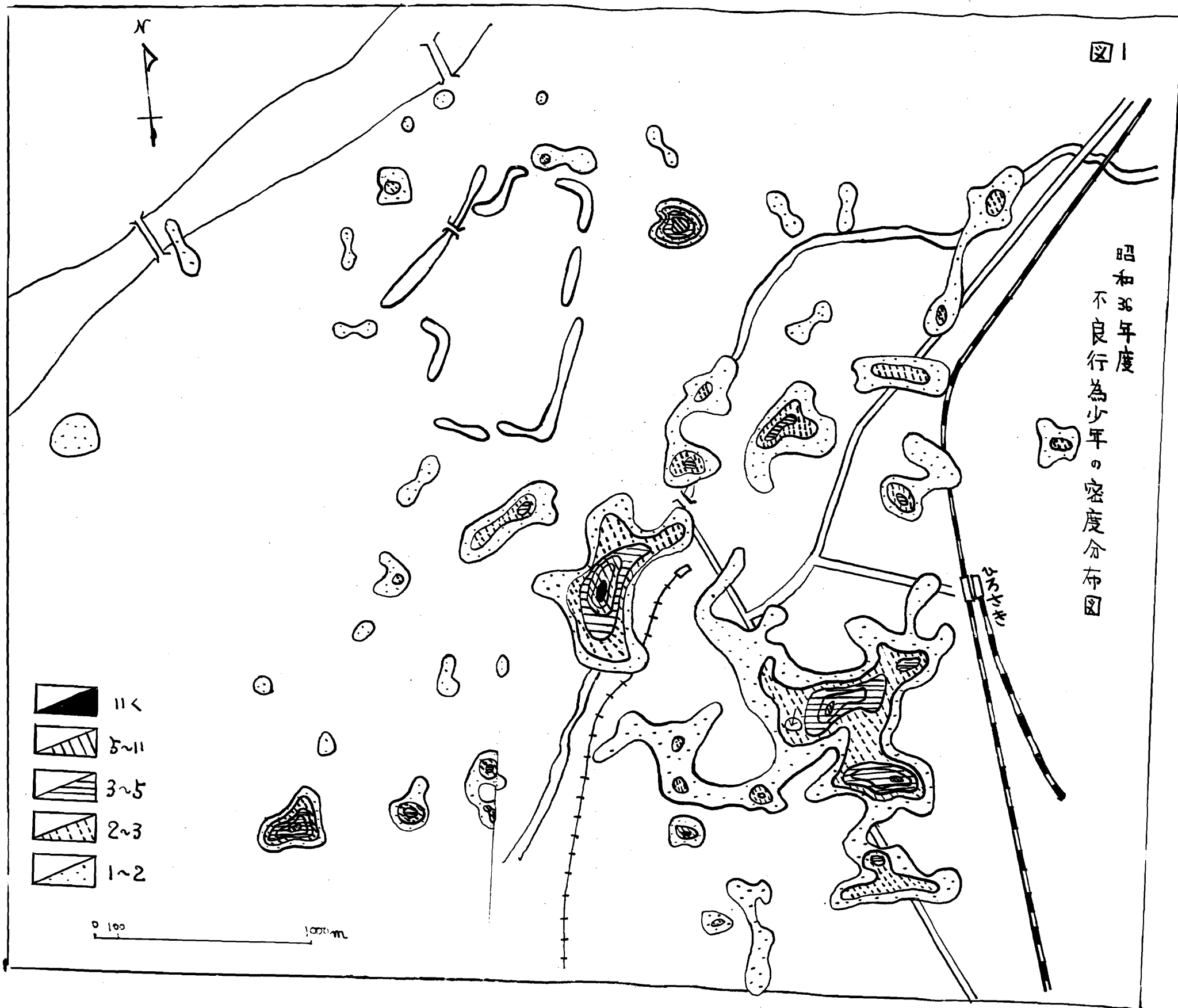
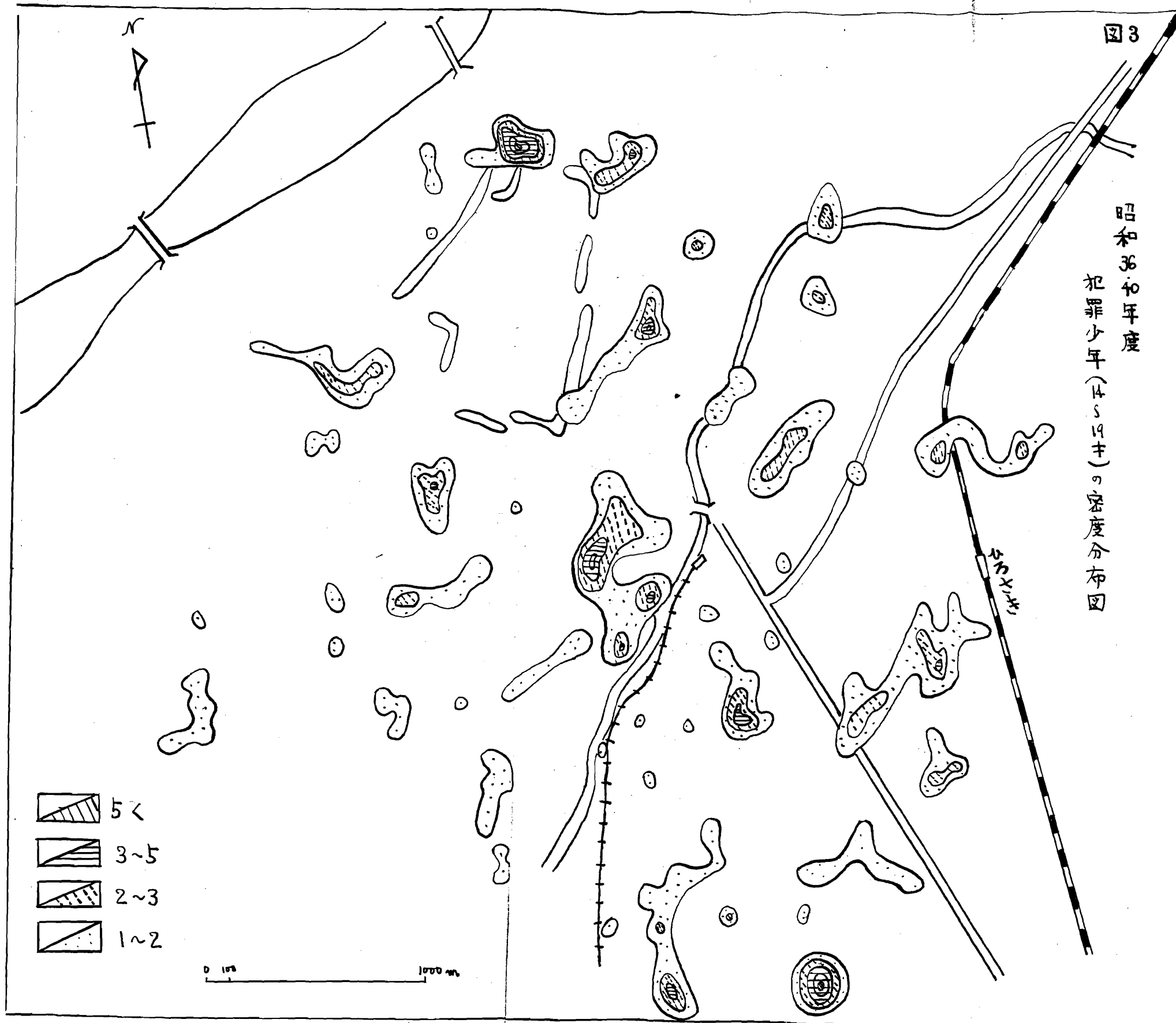




図3

昭和36年度
犯罪少年(14歳以上)の密度分布図



最も高い所は、12件の桶屋町、次いで8件の笹森町、6件の桔梗野樹木、椿町、大町が続き、更に駅前通りが続いている。6件以上の地域に共通していることは、大町を除いていずれもバス路線でない事であり、市街地の内部には桶屋町、外部には笹森町、桔梗野、椿町と北西部を除いて点在している。(図1)

(2) 40年不良行為少年の分布

最も高い地域は、15件の桔梗野、13件の長坂町、笹森町、東長町との二地区と次いで、8件の銅屋町、大町、6件の新寺町、松ヶ枝町、椿町、新椿町、茂森町と塩分町、品川町が続いている。旧市街地の周辺としての田町、富田町、茂森新町、駒越町、紺屋町など道路に沿って3～5件という不良行為少年居住地が表われるようになり、内部と外部とが関連性をもつように連なっている。(図2)

B、不良行為少年居住地の36年から40年への変化と、社会的、経済的な環境との関係を見ていく。

(1) 36年と40年との不良行為少年の変化。

36年と40年とは、前述のごとく件数は二倍になっていき、分布は全般的に内部から外部の方へ移動している。その理由は、36年では一番高い所は桶屋町であったものが40年になるとそれよりも外部の桔梗野、長坂町へと、不良行為少年の高密度地域が移っている事や、又弘前市の旧市街地の外郭である田茂木町、紺屋町、駒越町、茂森町、新寺町、富田町などの路線に沿って多くなっている事からも言える。36年に分散的であったのが40年になると、集中的傾向が出て来ている。

(2) 36・40年不良行為少年と接客業の分布との関係

不良行為少年の36年の居住地では、一番高い桶屋町が、接客業の高い所と一致しその他、大町、文京町、鍛冶町、新鍛冶町、西大工町、和徳町も接客業の高い地域である。桔梗野、樹木、笹森町、新椿町、椿町はその関係は見られない。40年では、36年と同じ傾向であるが新しく銅屋町、南横町、駒越町が加わり、これらも接客業の高い地域と一致する。全般的に36年から40年へかけて不良行為少年、接客業とも多くなっており、その増加傾向が同じであるかどうかは疑問であるが、市街地の内部ではその不良行為少年の居住地が、社会環境としての接客業分布の多い所に表われていることは確かである。

(3) 36・40年不良行為少年分布と所得との関係

36年不良行為少年の高い所、桶屋町、鍛冶町、新鍛冶町は、所得において21～40万円(3コ)、桔梗野、樹木20万円以下(3コ)、椿町40万円以下(3コ)、大町41～60万円(3コ)であり、これからも、所得が低い所にある事になる。同様に、40年を見ていくと、桔梗野60万円以下、長坂町40万円以下、銅屋町20万円以下、新寺町40万円以下、

椿町、新椿町40万円以下と同じく低所得地域に多いことがわかる。以上の事柄から、所得は不良行為少年を出す環境として大きな要因であることは、見のがせない。一方、接客業分布の多い所でもその中に、比較的所得が高い所、低い所（高い所・親方町、低い所・銅屋町）の差がある。しかし大都市などでは、中所得者以上に不良行為を起す者が、最近めだって増加している事が明らかにされているが、弘前市市街地では、まだまだ低所得者が、大部分を占める。

(4) 36、40年の不良行為少年居住地と人口、職業、住居の種類、量数との関係

人口の割合に対して世帯数の多い所は三八町（蔵主町、山王町、長坂町）、笹森町、桶屋町があり、これらは不良行為少年居住地の多い所である。借家は市街地平均割合27.8%であるのに笹森町44.4%、桶屋町44.9%、椿町51.2%、新椿町52.5%が高い所で、逆に持家の高い所が桔梗野53.5%となっており、平均の46.0%より7.5%高くなっている。間借において銅屋町が、他より10%ほど高くなっており、代りに借家、持家が少なく、所得が20万円以下という事を裏づけている。一軒当り量数は、市街地平均6量未満1.9%、6~20量58.3%、21~59量37.6%、60量以上1.9%であり、6量未満は、三八町5.2%、桶屋町3.3%、塩分町3.4%があることに注目したい。職業は生産運輸に従事する者が多い町は、笹森町、新椿町があり、事務関係に従事する者が多い町は、桔梗野樹木、長坂町、新寺町品川町、販売サービスに従事する者が多い町は、桶屋町、椿町、大町、東長町、銅屋町となり販売サービス業は、表通りに接客業は裏通り、横町へ、事務関係は住宅地となり、生産運輸は商店街から住宅地への漸移地域に存在する。

○、36、40年不良行為少年の居住地の高い所とその主な要因

36年不良行為少年居住地の高い所、桶屋町は、中学生の不良行為少年が多く、全体として接客業が多く存在し、しかも借家で一軒当り量数が6量未満の家が多い事、比較的人口密度が高く、家屋の密集している所である。鍛冶町に続く歓楽街の影響を受ける地域でもあり、40年になるとさらに西の銅屋町へ移行している傾向が見られる。職業としては販売サービス業でこの歓楽街的要素が最も強く中学生に影響しているように思われる。

笹森町は人口が比較的多い1,582人であり、借家が44.9%であり、職業は生産運輸に従事している者が多く、周囲の町（山王町、長坂町、東長町、田茂木町）に、所得40万円以下の低所得者が存在する。36と40年の不良行為少年の職業は、無職者であり、40年では長坂町へと移行してきている。

桔梗野は、終戦直後引揚者が多く住みついた所であるが、今日市街地の中で一番人口が多く2,467人であり、職業は事務関係の仕事をする人々が多く、地域としても住宅地帯である。36年不良行為少年のこの地域の不良行為少年はほとんどが中学生であったのが、40年ではそれら101人中62人まで無職者と変化している。この理由は明らかではないが、近年学

校の新設、1 Km位離れた地域に、新しい緑ヶ丘団地・金属団地などの住宅が急激に増加し、バスの増発が起った地域である。

楮町、新楮町は、借家が最も多く51.2%52.5%であり、職業は販売サービス業、生産運輸に従事している人が多い。昔、皮屋毛皮商が多く存在した特殊な地域で、近年そこを越えて鉄道住宅が伸びており、ここの不良行為少年は36.40年とも中学生が多い。

大町は、駅の近くでは飲食店・問屋関係の販売サービス業が多く、借家も35.9%と比較的多く、所得は低所得から高所得まで混在している。ここの不良行為少年は、36年において中学生が多かったのが、40年になると学生と無職者が半々位になってきている。

以上の事から、全般的に不良行為少年居住地の高い所は、低所得地域であり、そのうちでも人口の増加につれて都市化現象が郊外化の過程をたどりつつあるが、この過程は不良行為の上にも表われはじめている。

この例が、桔梗野、樹木、長坂町、笹森町、楮町、新楮町、その他市街地の外郭を構成する町（田茂木町、紺屋町、駒越町、茂森町、富田町）あらわれてきている。これに対して、市街地内部では、盛り場をかかえた地域が不良行為少年居住地である。それに次ぐのが桶屋町、銅屋町、鍛冶町、新鍛冶町、大町、駅前町の隣接地域である。

不良行為少年の居住地の多い所の大部分に借家、間借り、下宿屋などの割合が多いという事から、農村からの転入者の居住地であるという事を意味している。

Ⅳ. 犯 罪 少 年

36年の総数は、174件であったのが40年になると、二倍近くの310件に増す。

A、犯罪少年のドットマップと密度分布図

全体的に分散的であり、密度の高い所は亀甲町と若党町の交叉点とで5件、安原と豊原との接点5件であり、市街地の内部より外部の方に多い。次いで長坂町、東長町、鍛冶町、新鍛冶町、富田三丁目があり、これらには不良行為少年のような関連性は見られない。（図3）

B、犯罪少年居住地の36年から40年への変化と、社会的、経済的な環境との関係を見て行く。

(1) 36.40年犯罪少年と事件発生地との関係

犯罪少年の居住地の高い所と事件の発生率の高い所が一致している。その他、分散的犯罪少年居住地とは、対照的犯罪発生地の高い所は土手町であり商店街に集っており、これらで起る犯罪行為は大部分窃盗である。いずれにしても圧倒的に多くの場合事件の発生地と少年の居住地とは同一市で行なわれている事である。

(2) 犯罪少年居住地と旅館・飲食・接客業の分布との関係

二枚の密度分布図を重ねると、一致するのは、桶屋町・鍛冶町・新鍛冶町・銅屋町・大町・

南横町であるが、一致しないのは亀甲町・安原と豊原・長坂町と東長町となるのは主として、その少年の居住地が歓楽地か住宅地かによって一致するかもしれないか出てくるが、弘前市の内部か外部かの違いでもさる。これら犯罪少年の居住地の比較的高い所は、旅館・飲食・接客業の分布も高い事から、これらの環境に多少なりとも関係があると言えるだろう。

(3) 犯罪少年居住地と所得の分布との関係 犯罪少年の居住地の高い所、亀甲町と若党町は、40万円以下、安原と豊原80万円以下1コ、銅屋町20万円以下、桶屋町・新鍛冶町21～40万円、富田三丁目20万円以下となっており、低所得者が多いが、分散的に表われている。

④、犯罪少年と不良行為少年との関係

36年不良行為少年の多い桶屋町は、犯罪少年居住地の多い処と一致するのはその環境（接客業の分布が多い）の影響をも無視出来ない。40年11件以上の桔梗野・長坂町の二大不良行為少年居住地とは一致していない。以上の事から、桶屋町のように接客業、借家、低所得などマイナス面が揃う所が、不良行為と犯罪との居住地が出てくる。又、駅前・大町・茂森町・塩分町・銅屋町・亀甲町・駒越町とかなり広範囲で居住地が一致する。この事は不良行為から犯罪への可能性は、十分あると考えられる。

V、む す び

不良行為少年は、16・17才が多く無職者、高校生の増加、逆に農業従事者の少年が減少している。地域的には和徳地区、堀越地区、藤崎町において減少しており、逆に清水地区、岩木町において増加している。前者は昔からの交通便が良く、市街地への交流が多い地区であり後者は近年住宅の増加、バスの増発がおこってきている地区である。市街地において、不良行為少年の居住地域全体として内部から外部へ移動しており、少年居住地は40万円以下の低所得地域であり、特に不良行為少年の職業は低所得者ほど中学生が多く他は無職者が多い。又不良行為少年居住地の高い所には、二つの大きな理由が考えられる。一つは人口の推移につれて都市化の現象が郊外化の過程で、いままでの市街地外郭に位置した所を越えてさらに外部へと発展した所、ここでは桔梗野・笹森町・長坂町・楮町・新楮町があり、もう一つは歓楽街をかかえた地域あるいはこれら的高密度地域に隣接した地域、ここでは桶屋町・鍛冶町・新鍛冶町・銅屋町・大町・駅前が上げられる。その他は、住宅状況など環境が悪い者が多い。

犯罪少年において、市街地区では分散的に分布し、関連性はない。しかし犯罪発生地が盛り場とは一致する。その例として大町・桶屋町がある。

不良行為少年と犯罪少年とは、その居住地とほぼ一致するが、不良行為少年と犯罪少年とが同一人物という事は、ほとんどない。しかし不良行為少年も犯罪少年も同一市で行っている事が大半であり、その範囲は狭い。

以上まとめてきたが、その対策が具体的にどのように押進めたら良いかが今後の課題である

う。

本研究は、弘前大学の横山、水野両先生の御指導と弘前市役所青少年補導センター、および
税務課、弘前警察保安課および各関係者の方々の協力と援助をいただいでできたもので、ここ
に深く感謝する次第です。

参 考 文 献

- (1) 警察庁保安局防犯少年編（昭和40年）・「少年非行の実態に関する
調査報告書」
- (2) 全国市長会 東京市政調査会編・才20回 全国都市問題会議
文献2 都市の青少年問題論文集
- (3) 青森県警察本部 刑事部防犯課編（昭和40年）・少年非行
- (4) 佐藤寧子（1965）・都市化と犯罪・非行集中
都市問題 才56巻 才11号